

# 東日本大震災における消防の対応について

宮古地区広域行政組合消防本部

消防次長 永田 秀昭

## 1 はじめに

平成23年3月11日14時46分、東北地方太平洋沖を震源とするマグニチュード9.0という大地震が東日本を揺るがしました。さらにはこの地震により発生した巨大津波が岩手、宮城、福島をはじめ東日本太平洋沿岸を襲い甚大な被害をもたらしました。

当地方は過去にも明治三陸地震津波、昭和三陸地震津波、チリ地震津波と大きな被害を受けており、「津波てんでんこ」という言い伝えがあるとおり、防災意識は比較的高い地域ではありましたが、それでも最悪の大惨事となりました。



写真1 市街地に流れ着いた漁船

発災直後に停電となり、固定電話や携帯電話の通信網が不通となって情報が入らなくなりました。唯一、消防無線から入る情報が断片的ではありましたが被害の大きさが尋常ではないことを伝えてきました。その後、数日間は無眠不休、無我夢中で活動が続くこととなります。

～津波てんでんこ～とは、「大きな地震が起きたら津波の可能性があるので、ほかの事を気にせずにてんでんばらばらに一目散に高台に避難すること」の岩手県三陸地方に伝わる言い伝え。

## 2 被害の状況

この災害により当消防本部でも残念ながら職員4名が犠牲となり、負傷者1名を出したほか、署所2署、消防車両8台が被災しました。

また、宮古市田老地区にある「万里の長城」とも称された高さ10メートルの防潮堤は、波が軽々と越え大きく損壊しました。

管内（宮古市、山田町、岩泉町、田野畑村）の被害は9月1日現在

で死者1,041名、行方不明者435名、負傷者41名、被災家屋は全壊6,860棟、半壊1,466棟に上りました。

お亡くなりになった方々にはご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様には心よりお見舞いを申し上げます。



写真2 津波で損壊した田老地区の防潮堤

## 3 消防の対応

前述のとおり、発災初期の段階で停電となり、さらには通信網が不通となったことから、119番通報は発災直後の2件で、その後は駆け込みや唯一の通信手段である消防無線及び消防本部に派遣された警察官からの情報提供によって火災・救助・救急の対応をしました。

津波による浸水や大量のガレキによる交通障害などのため迂回路の通行を余儀なくされ、道路選定をしながら消防活動を行うこととなり、困難な状況下での活動となりました。しばらくして何箇所かの集落が壊滅的状況であることと集落と集落を結ぶ道路が津波で決壊して孤立しているなどの情報があり、想像を超えた未曾有の大惨事であることを知ることとなりました。

その後、断片的に通じた衛星電話で、県内応援隊と緊急消防援助隊の派遣が決定したとの情報を得ることとなりました。

自衛隊が消防本部に集結することとなり、夜になって自衛隊、県内応援隊の盛岡地区消防本部隊が到着し、翌日、早朝には緊急消防援助隊である秋田県隊が、午後には指揮支援隊の横浜市消防局隊が到着しました。

その後、海上保安署、警察、岩手県、消防団、医療機関、DMATなどの関係機関も消防本部に



写真3 関係機関合同対策会議

集まることとなり、朝の活動前の打ち合わせと夕方の活動後の報告と1日2回の合同会議を持ち、情報を共有しながら活動することができました。結果的にはこのように関係機関が一堂に会して会議を持ち、情報を共有した中で連携した活動を行えたことは大変有意義であったと思います。

#### 4 緊急消防援助隊等の活動

当地区に派遣された消防機関は、指揮支援隊として横浜市消防局から合計3隊、15名が3月12日～3月22日の11日間支援をいただきました。火災・救急・救助の実働部隊として秋田県から合計191隊、613名が3月12日～4月4日の23日間支援をいただき、その間火災8件、救助4件、救急280件の事案に対応してもらいました。

また、県内応援隊の盛岡地区消防本部には合計34隊、129名が3月11日～4月9日の30日間支援をいただき、その間火災1件、救助23件、救急85件の事案に対応してもらいました。

この中には、津波で被災した冷凍冷蔵工場からアンモニアガスの漏洩があり、当消防本部隊、緊急消防援助隊、県内応援隊が連携して活動した事例もあります。この事案対応中に余震があり、作業を一時中断して活動隊全員が高台に避難するという事もありました。

さらには県立宮古病院から内陸部の病院への転院搬送にあたっては緊急消防援助隊として花巻空港に派遣されている各都道県及び横浜市の消防・防災ヘリ

コプターにお世話になりました。

今回の災害はあまりにも規模が大きく、しかも広範囲であり同時多発的に事案が発生したことから、単独消防本部の消防力では到底対応できる状況ではありませんでした。そのような時にいち早く緊急消防援助隊等の派遣に対応して頂いた消防機関の皆様には心から感謝しているところであります。

## 5 他機関との連携活動

まず、自衛隊との連携活動であります。震災で石油コンビナートが被災したこともあり、燃料の供給がストップしたため燃料不足によって消防活動に支障がでかねない状況でありました。そのことを説明し燃料輸送を自衛隊に依頼したところ即座に対応していただき、なんとか危機を免れることができました。

また、被害状況の把握にあたっては、上空偵察のためのヘリコプターを手配してもらったほか、林野火災にあっては空中消火をお願いしました。さらには主要道路の啓開作業をいち早く進めてもらったことから、その後の活動が容易になりました。

警察との連携にあっては固定電話・携帯電話が障害のため119番が不通であることから、消防本部に警察官を24時間配置してもらい警察に入った火災・救急・救助の情報を直ちに提供していただき対応しました。

医療機関との連携にあっては、被災した医療機関もある中で医療機関別の救急患者の収容可能人数の把握等情報共有に努めました。その中であって、県立宮古病院には災害拠点病院でもあることから多くの患者を収容していただきました。



写真4 災害拠点病院の県立宮古病院

その他、県や市町村等の災害対応についても情報交換をした中で、関係機関の活動内容とその進捗状況を把握することができました。

## 6 おわりに

この度の大震災は、人によっては千年に一度の大災害であると言われるように未曾有の大災害でありました。消防機関は緊急消防援助隊等の応援を受けましたが、全体を振り返ると消防機関だけではやはり限界があったと思います。それは自衛隊を含め国、県、市町村、医療機関、自主防災組織、NPO、民間ボランティア等あらゆる機関や団体が連携して立ち向かわなければ対処できない、そのくらいの大災害であったと思います。また、交通網が寸断された状況の中では地域の中でお互いが助け合う共助の精神が大切なことを再認識させられました。と言いますのは「流された家から住民を救助した。」とか「ガレキに挟まれた人を救助した。」とか近所の住民が助け合ったという話しが後日談として聞こえてきたからです。

さて、当地方の現状ですが、地域によって復旧のスピードには若干の差がありますが、少しずつでも前に進んでいます。ガレキの撤去はほぼ終了し、仮設住宅の建築も終了して避難者の入居が進んでいます。復興までには、まだ時間はかかると思いますが、地域とともに頑張っています。

今回、応援を頂きました消防機関をはじめ全国の消防関係者、支援を頂きました全国の皆様に対し、重ねて心からお礼を申し上げます。